二松学舎松苓会 岩手県支部便り
発行日 二〇二二年 十月二〇日
編集者 宮本 義孝 第一〇五号

最近あった粋なはなし

矢澤喜成君は、今年三月、元松苓会山梨県支部長だった植松永雄氏に招かれ、甲州に在る名所旧跡をあちこち御案内いただいたそうである。

その折、明治天皇巡幸の行在所だった酒蔵「七賢」で、そこに伝わる軸物や扁額などを拝観する機会をえた。

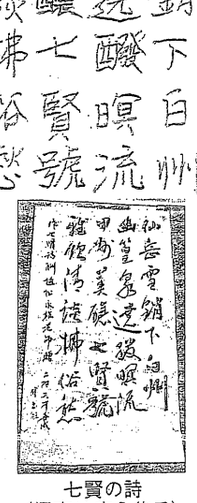
けれど、手書きの古い文書を読める人など、今ではおらず、それで、彼がそれを訓釈した。

そのことがあって、後日、「七賢」の美醸を沢山、頂戴した。

矢澤君は、お礼の書状を認めたけれど、それだけでは思いを十分尽くせない、と考えたようで、七言詩「七賢」をつくり、礼状に添えてそれを贈ったという。

仙岳雪銷下白州
幽篁泉遶醸瞑流
甲州美醸七賢號
雅飲清談拂俗愁

仙岳の雪は銷えて白州に下り
幽篁に泉ぱ遶りて瞑流を醸す
甲州の美醸 七賢の号あり
雅飲清談して俗愁を払わん


七賢の詩
(揮毫は家永修氏)

矢澤君は、東京に在る、某中・高等学校に勤めているが、松苓会の東京支部長でもある。東京の支部報が出来ると、送ってくる。そのお返しに私も作った県の支部報を送ったりしていたが、その内、会報に添えて、短い近況やら感想を交わすようになり、「七賢」は、そんな遣り取りの中で送られてきたものである。

私は浅学ゆえ、漢詩のことは良く分からない。けれど矢澤君の想いは理解できる。それで、「戴いたお酒のお礼に漢詩を作って贈るなぞ、なかなか粋でありますなあ」との一文を添えて送った。

ところで、何故ここで矢澤君のことを紹介したかというと、彼の七賢詩から考えたことが、二つ三つ、あったからだ。

現代では、パソコンやスマホなどが普及しているので、簡単に手紙を作ったり、メールで遣り取りが出来るようになった。車や人を待ちながら、或は、乗物の内でも、歩きながらでも手にした器具に指を動かしている人が多い。手書きの文書で遣り取りするなど、時代錯誤のようだ。

けれどお礼を受け取って、ありがたく思う気持は、どんなにスマホで意を尽くしても、矢澤君の漢詩の比ではなかろう。

「東京支部報」第七二号には、家永修氏の揮毫した七賢詩の写真が載っていた。戴いたこれなら、軸装して、時折、床の間にでも掛け、嘗って軸物や扁額を訓釈してくれた客人のあったことを想い出したくなるに違いない。

今では、こういうことは無くなったが、昔、漢詩は、和歌や俳句と並んで、ごく普通に作られていた。

器械文明が発達した今、生活は便利になった。けれど、人間の在りよう、心の深さを伝えるには、それで良かったのだろうか。案外、安易になった分、安易さにかまけて失った大切なものがあるのではないかと思うのだ。

それからもう一つ、考えたことがある。老いの生き方についてである。

嘗って人生は「五十年」だったが、今では「百年」と言われるようになった。人が現役を退き、その一生を終えるまで、残された時間は、三十年ぐらいはある。

けれど、それを見るに、その時間を生き生きと生きている人は、案外と少ない。多くは、時の過ぎゆくままに、一日一日をただぼんやりと過ごしている。

余生を充実して過ごしている人には、共通点があるようだ。それは、自分が本当にしたいこと、したいものを持っているということだ。好奇心を持ちつづけ、感動する心を失っていないということだ。

ただそれらは、歳を重ねれば、自ら身につくものでもない。また定年になって、時間に余裕ができたので、では間に合わない場合が多い。

そうなる前に、自分は何に向いているか、何なら、興味をもって飽きずにつづけられるか、と云った自分探しや、自分の思いや考えを、ある程度、表現できる技術を身につける学びはしておかなければいけないと思う。

世の中は便利になったけれど、そこから本物が生まれるわけではない。安易に修得できるものは、それだけの価値しかない。精進は、やはりしておかなければいけないのだと思う。